

彙 報

国際学会ニュース News of International Conferences

国際シンポジウム「ユーラシア草原を生きるモンゴル英雄叙事詩」
International Symposium “The Mongolian Epic of the Eurasian Grassland”

ボルジギン・フスレ (昭和女子大学)

Husel Borjigin (Showa Women's University)

2018年5月26日、国際シンポジウム「ユーラシア草原を生きるモンゴル英雄叙事詩」が昭和女子大学で開催された。昭和女子大学国際学部国際学科の主催、麒麟山酒造株式会社、モンゴル国「バルガの遺産」協会の協賛を得ておこなわれた。同シンポジウムは、新たに発見された文献・口承記録や学界の最新の研究成果を踏まえて、多様な要素が凝集されたモンゴルの英雄叙事詩にえがかれたユーラシア草原の歴史的・社会的・文化的空間をよみなおし、特色ある議論を展開することを目的とした。

同シンポジウムでは、坂東真理子・昭和女子大学理事長・総長が開会の挨拶を、二木博史・東京外国語大学名誉教授・日本モンゴル学会会長が閉会の挨拶を述べた。岡田和行・東京外国語大学大学院総合国際学研究院教授、李守・昭和女子大学国際学部国際学科長・教授が司会をつとめ、8名の研究者が報告をおこなった。

田中克彦・一橋大学名誉教授の報告「神話から英雄叙事詩への展開——ゲセル・ハーン物語のハルハ版とプリヤート諸版の比較を通じて」は、ハルハ版とプリヤート諸版のゲセル・ハーン物語を比較し、神話的伝承はシャマン時代の世界観に支えられて、宇宙の創成や神々の誕生、世界の秩序などを体系的に述べたものであること、プリヤート・ゲセルにおける西天44テンゲリと東天55テンゲリとの対立は、モンゴル原初の宇宙の構成をよく反映したものであること、木版本における、ホルモスダが率いる33勇士の物語はシャマン的世界観から仏典説話に転換されたものであること、などのかんがえをしめした。

二木博史・東京外国語大学名誉教授・日本モンゴル学会会長の報告「ゲセル・ハーン物語のナンドルモ魔王の章の再検討——写本の比較を中心に」は、ナンドルモ魔王の章の10種類の写本を比較し、写本には2種類の系統が存在すること、バルグジン本が相対的にあたらしい写本の系列に属するとすれば、「ナンドルモ魔王の章がまず成立し、そのあとに勇士たちの蘇生の章がつくられた」という説(フンダエワやレーリンツ)は成立しえないこと、などを指摘した。

チョイラルジャブ(Choyiraljav)・内モンゴル大学教授の報告「『アルハンガイ版ゲセル伝』の成立

年代について」は、『ノムチ・ハトン版ゲセル』を『アルハンガイ版ゲセル伝』と命名すべきと主張した上で、以下のことを指摘している。『アルハンガイ版ゲセル』の末尾に記されている康熙55年すなわち西暦1716年、『オールドス版ゲセル』の第2章の末尾に記されている乾隆12年すなわち西暦1747年などのことにより、『アルハンガイ版ゲセル』の書かれた年代は、18世紀前半の時期になる。『ゲセル伝』のさまざまな異本のうち、北京木版本の出版年（1716年）と特定のいくつかのトド文字版写本の書き写された年代ははっきりしているけれども、その他の写本の成立年代ははっきりしない。

ドジョーギーン・ツェデブ (Dojoogiin Tsedev) ・ウランバートル大学名誉教授の報告「ゲセル研究によるツェンディーン・ダムディンスレンのソ連での学位取得に関する諸史料、それらより得られる研究方法論的教訓」は、ソ連において最初に文献学で学位を取得したモンゴルの著名な文学者Ts. ダムディンスレンの学位取得に関する貴重な資料を紹介し、いかなる学術研究もイデオロギーや政治的利用の悪弊から遠く隔てられてあるべきと訴えた。

ボルジギン・フスレ・昭和女子大学国際学部教授の報告「モンゴル英雄叙事詩における匈奴文化」は、ワルター・ハイシッヒの研究とミルマン・パリー、アルバート・B・ロードの理論に基づいて、『ジャンガル』と『ゲセル/ケサル』における額や頬に焼き印をおすモチーフと髑髏盃モチーフ、車モチーフ、ふいごモチーフを検討し、モンゴルの英雄叙事詩における複数のモチーフには匈奴からモンゴル帝国時代にかけての複数の時代の社会、文化情報が含まれており、かつて存在していた歴史上の形態が審美的文学・芸術——英雄叙事詩のなかに沈殿し変容した結果だと述べた。

藤井真湖・愛知淑徳大学交流文化学部教授の報告「『元朝秘史』におけるシギ・クトゥク——ジャムカ亡き後の作者の共感対象として」は、シギ・クトゥクという人物に関する叙述を対象に、秘史がどのような意図をもって創作されたのかについて考察し、『元朝秘史』（『モンゴル秘史』）は最終的に、作者（チンギス・ハーンの疑似的父親）——クトゥク（作者の“疑似的子供”）——チンギス・ハーン（作者の“疑似的子供”）のあいだで作成された“疑似的親子の共同作品”という意味をもつと結論づけている。

上村明・東京外国語大学非常勤講師の報告「アルタイ・オリアンハイの英雄叙事詩——モンゴル文化におけるその位置」は、アルタイ・オリアンハイの英雄叙事詩は、まず「文芸」として、そして社会主義時代後半においてはメディアの発達とアマチュア芸能者発掘の運動によって「芸能」として、さらに1980年代からは「真正な」伝統として「発見」されたと述べ、アルタイ・オリアンハイの英雄叙事詩は、ラジオなど新しいメディアの普及と「伝統」概念の変化によってその地位を獲得したと主張した。

李守・昭和女子大学国際学部教授の報告「国家建設のモジュールとしての叙事詩——朝鮮のばあい」は、叙事詩はナショナリズムと親和的であり、独立国家では、新しい国をつくるために英雄叙事詩がとりあげられ、国民の文化的象徴とされると指摘したうえで、ユーラシア大陸にあまねく分布した社会主義諸国では、スターリン、毛沢東、金日成といった指導者たちを「英雄」として崇拜する叙事詩的作品がつけられたこと、革命の総本山であるソ連に学んだ音楽家たちが、叙事詩による国家統合の役わりをはたしたのであること、などをのべた。

本シンポジウムの成果をまとめた論文集は2019年2月に三元社から出版される予定である。

国際会議「世界のモンゴル資料の遺産」

International Conference on “Mongolian Source Heritage in the World”

二 木 博 史 (東京外国語大学)

FUTAKI Hiroshi (Tokyo University of Foreign Studies)

2018年8月17日、18日の両日、モンゴル教育文化科学スポーツ省、モンゴル国立大学、モンゴル国立図書館の共催で、モンゴル国立図書館の大閲覧室を会場に、「世界のモンゴル資料の遺産」(モンゴル語では“Монгол сурвалж бичгийн өв”)というテーマの国際会議がひらかれた。組織者は、モンゴル国立大学のモンゴル研究センターの所長D. ザヤーバートル教授だった。会議の目的は、世界各国の諸機関、個人の所有するモンゴル研究のための基本資料についての情報を研究者が共有できるようにする、というものだった。

17日午前中の開会式では、教育文化科学スポーツ省官房長代行T. ニャムオチル、モンゴル国立大学学長Ya. トゥムルバートル、モンゴル国立図書館長B. イチンホルローが祝辞をのべた。つづいて4名が基調報告をおこなった。まずAlexander Vovin (フランス国立東洋言語文化学院)「フイス・トルゴイ碑文の紹介」は、摩耗がはげしく肉眼では判読が困難なフイス・トルゴイ (Khüi tolgoi) 碑文を3D撮影して解読した成果についてのたいへん衝撃的な内容の発表であった。まずブラーフミー文字でかかれた本碑文が突厥第一帝国時代のものであって、突厥第二帝国時代のオルホン碑文よりもふるいことを確認したあと、碑文の言語は柔然語、あるいはpara-Mongolicである可能性がたかいと主張した。もしこの推定がただしければ、アルタイ系のタイプの言語でもっともふるい書写語は、チュルク系の言語ではなく、モンゴリック系の言語ということになり、中央アジア言語史をぬりかえることになる。

つぎのВладимир Успенский (サンクトペテルブルク大学)「サンクトペテルブルク大学図書館所蔵のふるいモンゴル語文献について」は、O.M. Ковалевскийの1831年の北京木版本の収集にはじまる同大学図書館のモンゴル文献コレクションの内容についてのべた。1894年に張家口(Zhangjiakou)で収集したリグデン・ハーン時代の全113巻のガンジョール写本は、コレクションのなかでもとくに重要である。二木博史 (東京外国語大学)「東京外国語大学図書館に所蔵されるいくつかの貴重な資料について」は、同大学図書館で“旧分類MO”として分類されている資料は、電子目録が不備なため、対外的にあまりしられていないが、19世紀以来の基本的なモンゴル研究の文献のほかに、木版本、写本をもふくむことを紹介し、さらに1945年以前に刊行された新聞・雑誌のコレクションや21世紀COEプログラムの予算であらたに購入した木版本、古地図などについてもべた。Ц.Шагдарсүрэн (オラーンバートル国際大学)「テキスト学による文献の研究」は、民主化後の1991年からモンゴル国立大学で社会主義時代のТекстологияとはまったくことなるあたらしいテキスト学の教育がはじまったことを紹介し、資料研究が歴史学に限定されず、言語学、文字学、文化学などは幅広い分野で要求されることを強調した。

同日の午後には、9名が研究発表をおこなった。まず、Birtalan Ágnes (国際モンゴル学会会長、ハンガリーのエトヴェシュ・ロラード大学)「黄色の神々と黄色のひとびと—ハンガリーにおける

Ligeti Lajosの遺産」は、ハンガリー科学アカデミーのモンゴル語・マンジュ語文献コレクションが内モンゴルでリゲティが収集した写本・木版本によって基本的に構成されていることを指摘するとともに、かれの内モンゴル調査(1928年～1931年)の報告のうち、一般読者むけに1934年にハンガリー語で出版された *Sárga istenek, sárga emberek*、すなわち『黄色の神々と黄色のひとびと』の内容について紹介した。つぎに Анна Цендина Дамдиновна(ロシア人文大学)「夢占いの経典について」は、Ц. Дамдинсленのコレクションにふくまれる4点とサンクトペテルブルクの東洋文献研究所所蔵の7点の夢占いの経典を3種類に分類しうることを、チベット・インド起源とおもわれるもののモンゴルの特徴もあきらかに確認できることをのべた。Čenggel(中国社会科学院歴史研究所)「デード・モンゴルのツァイダム地方で発見された大元国時代の貴重な文字資料、文具」は1955年以降に発見された、パクパ文字の印刷された紙幣、モンゴル文字のほられた矢、文具などについてくわしく紹介した。Ц. Цэрэндорж(モンゴル国立大学)「エルデニゾー寺の主殿(ゴル・ゾー)のモンゴル語墨書のあらたな解釈」は、エルデニゾー寺の中心となるゴルバンゾーの主殿の棟木にかかれた墨書のこれまでの解釈はモンゴル語として不自然だと批判し、問題の箇所について *yilayuyisan-u tantun-i* というよみかたを提示した。

コーヒーブレイクのあと、Р. Отгонбаатар(モンゴル科学アカデミー言語文学研究所)「白樺文書のなかで特に貴重な資料」は、1970年にモンゴルで発見された白樺文書のなかにふくまれる、これまで注目されてこなかったいくつかの文書、たとえばモンゴル帝国時代からつたえられてきたテキスト、チベット語の木版テキストなどについて紹介した。つぎに上村明(東京外国語大学)「アルタイ・オリアンハイ右翼総管バルダンドルジが1913年にR. ナワーンツェレンとジャルハンズ・ホトグト・ダムディンバザルにおくった書簡」は、ボグド・ハーン政権への“帰順”の書簡がボグド・ハーンではなくナワーンツェレンやダムディンバザルにあてられた理由、書簡のなかに反映された宗教的なつながりについてのべた。Elisabetta Ragagnin(ヴェネツィア大学)「ヴェネツィア所在のマルコ・ポーロ写本」は、2015年に刊行されたデジタル版の *Dei viaggi di Messer Marco Polo* について紹介するとともに、ヴェネツィア大学とモンゴル国立大学の共同プロジェクトにもふれた。Kristina Teleki(エトヴェシュ・ロラード大学)「1938年にオラーンバートルの一部の寺院が破壊されたことに関する文書史料」は、国立文書館所蔵の1938年に作成された文書(1-6-401)にオラーンバートルのどの寺院の建材をどの政府機関にうつすかについて詳細な記述があることを紹介し、破壊された寺院の建材が再利用された事実を指摘した。Э. Жигмэддорж(モンゴル国立大学)「ハルハの白樺法典—16、17世紀の歴史資料」は、白樺法典のテキストの形式上の特徴についてのべるとともに、オリジナルのテキストの出版を予告した。

ふつかめの8月18日は他の国際会議に出席した関係上、報告者は発表をきくことができなかった。よってプログラムに記載された発表者とタイトルを記録しておくにとどめる。

Ш. Чоймаа(モンゴル国立大学)「資料の比較研究の方法論」

Mehmet Ölmez(イスタンブール大学)「パクパ文字文書にみられるウイグル語の影響」

Р. Бямбаа(ワルシャワ大学)「モンゴルの僧侶がチベット語であらわしたモンゴル語文典」

Д. Анхбаяр(モンゴル国立大学)「モンゴル帝国史にかかわるペルシア語史料」

- Rákos Attila (エトヴェシュ・ロラード大学) 「モンゴル人に関する13世紀のハンガリーの資料—「タルタルによるハンガリー王国の破壊に関する悲歌」と他の文書」
- П.Дэлгэржаргал (モンゴル国立大学) 「古代の遊牧民の歴史にかかわる西周時代の青銅器銘文」
- Д.Ундрах (モンゴル国立大学) 「14世紀から16世紀のモンゴル史にかかわる漢語史料」
- Н.Сүхбаатар (モンゴル教育大学) 「トド文字でかかれた歴史資料のテキストの研究」
- А.Ариунбайгаль (モンゴル国立大学) 「『高麗史』のなかのモンゴルに係する記事 (1270年～1280年)」
- Т.Отгонтуул (モンゴル国立大学) 「言語、歴史の重要な資料としての舊満洲檔 (*Jiumanzhoudang*)」
- Б.Түвшинтөгс (モンゴル国立大学) 「モンゴル国立図書館所蔵のマンジュ語書籍とその目録」
- Ворјигин Оун (内モンゴル師範大学) 「新発見のパクパ文字の碑文」
- Д.Бүрнээ (モンゴル国立大学) 「アグワーンダңдал著の辞典について」
- Э.Пүрэвжав (モンゴル科学アカデミー言語文学研究所) 「A.モスタールトの『モンゴル秘史』研究への貢献」
- Kereidjin D. Bürgüd (中国社会科学院) 「『モンゴル秘史』でつかわれた漢字表記規則」
- Б.Сайнбилэг (モンゴル国立図書館) 「*Merged yarqu-yin oron*のアビダルマの章—Abhidharmasamuccayaのモンゴル語訳」
- Čolmongerel (内モンゴル財經大学) 「金光明經の2種類のカルムイク木版とそのチベット語原典」

第11回ウランバートル国際シンポジウム「キャフタとフレ—ユーラシアからの眼差し」
The 11th International Symposium in Ulaanbaatar “Kyakhta and Khūriye: From the Viewpoints of Eurasia”

ボルジギン・フスレ (昭和女子大学)

Husel Borjigin (Showa Women's University)

公益財団法人渥美国際交流財団関口グローバル研究会 (SGRA) と昭和女子大学国際文化研究所、モンゴル国立大学アジア研究学科の共同主催で、在モンゴル日本大使館、昭和女子大学、モンゴル科学アカデミー国際研究所、公益財団法人三菱財団、モンゴルの歴史と文化研究会の後援で、第11回ウランバートル国際シンポジウム「キャフタとフレ—ユーラシアからの眼差し」が2018年8月31日にモンゴル国立大学で開催された。モンゴル、日本、ロシアなどの国や地域からの80名余りの研究者が参加した。

キャフタ、フレにかかわる資料は主にロシアやモンゴル、中国、日本、台湾などの国や地域の図書館にねむっており、その多くはいまだ利用されていない。歴史の連続性から多角的にキャフタとフレにおける出来事を把握することは、注目すべき課題としてのこされている。本シンポジウムは、近年の研究の歩みをふりかえり、新たに発見された歴史記録に基づいて、ユーラシアの眼差しからキャフタとフレにおける多様な歴史・政治・経済・文化的空間を考察し、その遺産を再評価しながら、今後、いかにその栄光を再興していくかなどをめぐって、創造的な議論を展開することを目的とした。

開会式では、昭和女子大学学長金子朝子教授、モンゴル科学アカデミー副総裁G.チョローンバートル (G.Chuluunbaatar) 氏、在モンゴル日本大使高岡正人閣下が挨拶と祝辞を述べた。その後、共同発表を含む、14本の研究報告がおこなわれた。会議の公用語はモンゴル語・日本語であるが、モンゴル語が主流を占め、日本語の報告にはモンゴル語通訳がつけられた。

本シンポジウムの成果を、以下の3項目にまとめたい。

第一に、従来、研究者が利用し得なかった、キャフタ、外モンゴルにかかわる地図を中心に検討する報告が多かったことは、注目すべき点の一つである。

日本モンゴル学会会長、東京外国語大学名誉教授二木博史の報告“On a map of Ikh Khuree published by the Japanese Army General Staff Office” は、日本陸軍参謀本部がシベリア出兵の前、1918年にイフ・フレでおこなった測量調査、および同調査に基づいて1920年に刊行したイフ・フレの地図 (1:100,000) について綿密に考察、分析し、同地図ははじめて近代的手法で作成されたイフ・フレの地図であると指摘した。

ボン大学招聘研究者A.ガンチメグ (A.Ganchimeg) の報告“Херман Констан ба монголчууд (ヘルマン・コンステンとモンゴル人)” は、著名なドイツのモンゴル学者ヘルマン・コンステン (Hermann Consten, 1878～1957年) の生涯をさぐった上で、かれが収集したモンゴルの地図を紹介した。

東京外国語大学講師上村明の報告「トゥシェート・ハン部中旗の地図におけるイフ・フレ」は、清朝期に作成された4枚のトゥシェート・ハン部中旗の地図に描かれたイフ・フレを比較・分析し、この旗の領主デレグドルジが庫倫辦事大臣として商人をセルベ河東岸から西岸に移動させた後、お

そくとも同治7年から、フレーを中心として左右に商人地区、その南に左右の官庁街(ホロー)が位置するという左右対称の図式によってイフ・フレーが概念されていたことを明らかにした。

第二に、キャフタにかかわる国際条約についての研究が進展を見せた。

モンゴル国立大学終身教授J. オランゴア (J. Urangua) の報告“Хиагтын гэрээг тойрсон асуудлууд (「キャフタ条約」をとりまく諸問題)”は、「キャフタ条約」が正式に調印されたのは1727年ではなく、1728年であること、調印にいたるまで交渉が長引いたこと、そのため言語によって条約の複数のバージョンが存在することなどを指摘した。

モンゴル科学アカデミー国際研究所教授O. バトサイハン (O. Batsaikhan) の報告“Хятад, Орос, Монгол гурван улсын хэлэлцээрт Монголын талын төлөөлөгчдийн баримталсан байр суурь, гүйцэтгэсэн үүрэг (中国、ロシア、モンゴル三者協議におけるにモンゴル代表の立場と役割)”は、中国、ロシア、モンゴル三者協議は強者が弱者をおさえつけ、他者の利益に支配されることとなったと言えるが、別の面から見れば、2つの強国のモンゴルにおける利害の交差点で、モンゴル側がみずからを守り抜き、モンゴルを一つの国内ではなく国際的な主体のレベルに引き上げる見通しをもって講じた手立てであったという点において特異なこととなったのだという考えを提出した。

第三に、新資料を用いて、キャフタとフレーの近現代について検討した新説が提示された。

モンゴル科学アカデミー国際研究所研究員P. ビャムバホロル (P. Byambakhorol) の報告“Тасарсан хязгаарт зарсан явдлыг тэмдэглэсэн бичиг, түүнд Хүрээ Хиагт орчмын газар нутгийг тэмдэглэсэн гүхай (『異域録』に記録されたフレー、キャフタ)”は、清朝の兵部員外郎(官職名) 図理琛 (Tulišen, 1667～1740年) の1715年から1721年にかけてのモンゴルとシベリア、ウラル地域での調査に基づいて書いた『異域録』を糸口に、当時のキャフタとフレーの社会、人口、経済状況を考察した。

新潟大学人文学部准教授広川佐保の報告「ハルハ・モンゴルにおけるロシア人移住——20世紀初頭、エルデネ・ワン旗の土地文書をもとに」は、1911年の独立から、「キャフタ協定」締結、そして自治取り消しに至る時期の、ハルハ・モンゴルにおける、ロシア人の土地占拠問題について考察し、ボグド・ハーン政権は、独立宣言後、外国人の土地利用を制限し、土地使用料(賃借料)を国庫の収入に充てようとしていたこと、ロシアはいち早くモンゴルでの経済的権益を確保し、条約に基づき土地使用権を獲得して、その足場を固めようとしたこと、モンゴル人・ロシア人・漢人を結びつけていたのは、土地賃借料や契約など、当時のモンゴルで浮上してきた近代的な経済関係であったこと、を指摘した。

ロシア連邦ブリヤート共和国キャフタ郷土博物館副館長L.B. ツィデノヴァ (L. B. Tsydenova) の報告“А.Д.Корнакова – монгольских далей пионер (A.D. コルナコヴァ——はるか遠きモンゴルの先駆者)”は、キャフタ郷土博物館に所蔵されるロシアの女性民族学者A.D. コルナコヴァ(1865～1941年)のコレクションを紹介し、モンゴル研究における同コレクションの重要性を強調した。

モンゴル国立教育大学教授L. アルタンザヤー (L. Altanzaya) の報告“Их Хүрээний зарим дацангийн жасын асуудалд (イフ・フレーのいくつかの寺院における財務問題)”は、1910年代のイフ・フレーの中心地域たる寺院区における財政状況を検討した。

モンゴル科学アカデミー歴史・考古学研究所研究員N. ヒシグト (N. Khishigt) の報告“1921 оны Монголын хувьсгалын түүхэн дэх Хиагт хот (1921年のモンゴル革命におけるキャフタ)”は、モンゴ

ル現代史におけるキャフタの位置づけを新たにこころみだ。同報告をめぐって、会場での議論が盛り上がった。

モンゴル国立大学准教授B.ヒシグスフ (B.Khishigsukh)と講師E.トグトーン (E.Togtuun)の報告“Хүрээ дуу, дуулалт жүжгийн уламжлал, шинэчлэлийн асуудалд (「フレーの歌」、およびその演劇における伝統と革新)”は、「フレーの歌」およびその演劇の伝承について検討し、それは元の雑劇に由来すると推測した。

私の報告「20世紀前半のモンゴルに関する映像アーカイブの構築について」は、朝日新聞富士倉庫資料所蔵の外モンゴルの写真資料に即して、モンゴルに関する関係諸国の写真、映像アーカイブ情報の資源化とネットワークの構築について検討し、その実現を展望しながら、問題点を指摘した。

高知大学教育研究部准教授湊邦生の報告「キャフタとフレー／ウランバートルを取り巻く「いま」: Life in Transition Surveysが示すポスト・ポスト社会主義モンゴルとロシアの社会の動向」は、欧州復興開発銀行(EBRD)によるLife in Transition Survey (LiTS)を取り上げ、キャフタとフレー／ウランバートルを取り巻く社会背景について、定量的な資料を紹介し、こうした課題に取り組むことによって、キャフタとフレー／ウランバートルの「いま」を形成する社会条件を明らかにすることが可能となると述べた。

同シンポジウムについて、『ソヨンボ』や『オラーン・オドホン』紙、Mongol TVなどにより報道された。また、本事業の成果をまとめた論文集が2019年3月に出版される予定である。

国際会議「ユーラシア遊牧民の歴史的道程：政治・社会・文化」

International Conference “Historical Path of Mongolian Nomadic Pastoralists: Politics, Society, Culture”

岡 洋 樹 (東北大学東北アジア研究センター)

OKA Hiroki (Center for Northeast Asian Studies, Tohoku University)

この会議は、モンゴル科学アカデミー歴史学考古学研究所・内蒙古師範大学旅游学院・ロシア科学アカデミーシベリア支部人文学・北方民族問題研究所・東北大学東北アジア研究センターの共催で、2018年9月6日と7日の両日、モンゴル国ウランバートルで開催されたものである。

東北大学東北アジア研究センターは、2000年8月、モンゴル科学アカデミーと大学間学術交流協定を締結した。同センターはモンゴル研究の分野で、さらに2008年4月に中国内蒙古師範大学蒙古学学院、同年9月に同大旅游学院と部局間学術交流協定を締結している。ちなみに中国では、内蒙古大学蒙古学学院 (2008年9月)、中央民族大学蒙古语言文学系 (2014年2月)ともそれぞれ部局間協定を有している。さらにロシアとは、早く1992年8月にロシア科学アカデミーシベリア支部と大学間協定を締結していたが、2009年9月に同支部人文学・北方民族問題研究所 (サハ共和国)とも部局間協定を締結、教員の招聘など、学術交流を重ねてきた。

これらの協定に基づき、東北アジア研究センターは、2003年9月に歴史研究所と共催したシンポジウム「モンゴル 歴史と民族の諸問題」以来、第二回「1911年モンゴル民族革命の前提条件と国際情勢」(2005年12月、モンゴル科学アカデミー国際研究所と共催)、第三回「モンゴル史研究の新動向、当面する課題 (17～20世紀初頭)」(2007年9月、モンゴル科学アカデミー歴史研究所と共催)、第四回「モンゴル史研究と史料」(2009年9月、同歴史研究所、内蒙古師範大学蒙古学学院と共催)、第五回「清朝とモンゴル人」(2012年9月、同歴史研究所、内蒙古師範大学旅游学院と共催)、第六回「ユーラシアの遊牧：歴史・文化・環境」(2014年9月、同歴史研究所、内蒙古師範大学旅游学院、ロシア科学アカデミーシベリア支部人文学・北方民族問題研究所と共催)、第七回「17世紀のモンゴルと内陸アジア」(2016年9月、モンゴル科学アカデミー歴史学考古学研究所、内蒙古師範大学旅游学院、ロシア科学アカデミーシベリア支部人文学・北方民族問題研究所と共催)と、ウランバートルではほぼ隔年で一連のシンポジウム・国際会議を共催してきた。

今回、八回目となるウランバートルでの会議は、「ユーラシア遊牧民の歴史的道程：政治・社会・文化 *Евразийн нүүдэлчдийн түүхэн замнал: Төр, нийгэм, соёл*」と題して、前回と同じく、モンゴル科学アカデミー歴史学考古学研究所・内蒙古師範大学旅游学院・ロシア科学アカデミーシベリア支部人文学・北方民族問題研究所と東北大学東北アジア研究センターの共催で開催された。今回の会議は、国際モンゴル学者会議が加わり、同会議の企画によるモンゴルの歴史学者 Sh. ナツァグドルジの生誕百周年記念学術会議と併せた国際会議として合同企画となった。会議は全体セッションと第一部会「アカデミー会員 Sh. ナツァグドルジとモンゴル史研究」、第二部会「ユーラシア遊牧民の歴史的道程：政治・社会・文化」の二部会で構成された。

全体セッションは、9月6日 (木)、モンゴル国教育・文化・科学・スポーツ省会議室で開催された。モンゴル科学アカデミー歴史学考古学研究所長 S. チョローン博士の開会挨拶の後、モンゴル国大統領

領Kh.バトトルガ氏および教育・文化・科学・スポーツ省大臣Ts.ツォグゾルマー氏の挨拶の代読、モンゴル科学アカデミー総裁D.レグデル博士、東北大学東北アジア研究センター教授岡の挨拶に続いて、歴史学考古学研究所のアカデミー会員J.ボルドバートル博士が「20世紀モンゴル史研究の第一人者」と題する基調講演を行い、Sh.ナツァグドルジの歴史研究や文化活動の意義を論じた。

続いて会場をモンゴル文化宮殿内のモンゴル科学アカデミー会議室に移し、二つの部会が二日間に涉って開催された。第一部会「アカデミー会員Sh.ナツァグドルジとモンゴル史研究」では、S.チョローン、S.ツォルモン、A.プンサク、N.アリオンゴア、J.バザルスレン、P.デルゲルジャルガル等、モンゴルの主立った一線の研究者・文化人16名が、それぞれの立場からSh.ナツァグドルジの研究、活動について論じた。ナツァグドルジは、主に清代モンゴル史の研究に多大な業績をあげた研究者であるが、その研究は、モンゴル帝国期にはじまるモンゴル封建制の歴史全般に及ぶ。また彼は、多数の歴史文学作品や歴史を題材とした映画の脚本も手がけており、その業績は多岐にわたる。ナツァグドルジは、唯物史観の理論的拘束とソ連の影響が強かった社会主義時代のモンゴルにおいて、唯物史観を基本的な方法としながらも、独自の見解を提示し続けた。今日から見ると克服すべき問題は多々あるとは言え、彼がモンゴル史研究史上傑出した研究者であることは疑いない。第一部会の各報告では、会議の性格上ナツァグドルジの業績に対する批判的な議論は出なかったとはいえ、とくに清代モンゴル史の諸問題の研究を、彼の研究成果を批判的に摂取しつつ前身させることは重要な課題でありつづけている。

第二部会「ユーラシア遊牧民の歴史的道程：政治・社会・文化」は、9月6日から7日の二日間行われた。31件の報告が予定されていたが、ロシアから参加予定だった研究者の内、出席できない者が出た。日本からは、岡のほか、萩原守、フフバートル、堀内香里、岡イルディコー、中村篤志の六人が発表を行った。それぞれの題目は、以下の通り。岡洋樹「満洲時代のモンゴルにおける満洲の法が実効性をもたなかった事例」、萩原守「人身売買禁止に関する満洲時代の蒙古律例」、フフバートル「ブリヤート共和国図書館蔵内モンゴル人民革命党史料：“Dotuyadu Mongyul-un arad-un qubisyaltu nam-un ündüsün jorilta”について」、中村篤志「満洲時代の駅とハルハ社会：サイロス駅を例として」、堀内香里「清代モンゴルにおける「養育」の問題：モンゴル行政の問題から」、岡イルディコー「モンゴル帝国の衣服の伝統とそのモンゴル人の衣服に対する影響：水平区分をもつコート」。

中国からの参加者による報告は以下の通り。那順烏力吉「大清国時代のモンゴル社会における『ダルハン制度』研究」（内蒙古師範大学）、佐藤憲行（復旦大学）「理藩院則例の一規定について」、達日夫「帝政ロシアの鉄道とガンジュール廟市」（内蒙古行政学院）、齊英「清代モンゴル社会におけるインジ慣行」（師範大）、全栄（内蒙社会科学院）「アルグ雲南王の大蔵経頒布の令旨初探」、根全（内蒙古師範大学）「Geriyesü erdem-ün sang orosibaiという文件に関する研究」、胡日查（内蒙古師範大学）「モンゴルのボルジギン氏貴族同士の婚姻について」、玉海（内蒙師範大学）「清代オンニウド右旗の王公タイジの系図の研究」、呼和木其尔（内蒙古大学）「清代ハラチン地域におけるモンゴル貴族タブナンの財産相続」、烏藍巴根（中国社会科学院）「シャグダル・ハムバ・ラマに関する歴史資料」、李春梅（内蒙社会科学院歴史研究所）「単于権力の性格について」、哈斯巴根（北京社会科学院）「清代イェ・ゾー盟の駅に関する諸問題」、烏仁其其格（内蒙財政大学）「清・民国期内モンゴルの戸口冊とその価値」、ゲセル（ウランバートル大学）「オロチュ・シグシ、ホトク・シグシ及びドヨン・

ウリヤンハイ」。

ロシアからの出席者による報告は、A.A.ボリソフ (人文学・北方少数民族問題研究所)「1720年代～18世紀後半におけるロシア帝国北東部(ヤクーチアを例として)と清朝支配下のモンゴルにおける地方官庁改革の歴史的経験」、S.Kh.D.スィルティボヴァ (ロシア科学アカデミー東洋学研究所)「13世紀のモンゴルのチェス:遺産の発見」、U.P.ピチュルデイ (トゥバ人文学・応用社会経済学研究所)「現代トゥバ人の祖先森のウリヤンハイとタグナ・ウリヤンハイ」であった。

モンゴルからは、以下の発表があった。B.ナツァグドルジ (モンゴル科学アカデミー歴史学考古学研究所)「清朝属下のモンゴル人の歴史認識:モンゴルのノヤン達の文書往来を例として」、N.ハタンバートル (歴史学考古学研究所)「ハルハ・ユンシェブ・タイジの由来について」、E.ジグメドドルジ (モンゴル国立大学)「『ハルハ白樺法典』における16～17世紀モンゴル史に拘わる情報」、L.アルタンザヤア (モンゴル国立教育大学)「モンゴルの掌印ホトクトのシャビ転生僧について」、Na.スフバータル (モンゴル国立教育大学)「ズーンガル・ハーン位継承の歴史について」、Sh.ムンフバータル (モンゴル国立教育大学)「トシェート・ハン部エルデネ・ザサグ旗の旗界図三件について」。

報告の大半は17～20世紀初頭、清代に関わる内容であったが、この分野では、近年の文書史料の刊行や、文書館の開放などにより、急速に研究が蓄積されている。報告の多くは、清代文書を駆使した研究の成果であり、研究の進展ぶりをよく示すものであった。最後に、S.チョローン歴史学考古学研究所長、胡日查内蒙古師範大学旅游学院教授、岡が会議の総括を行い、再来年の再会を約して散会した。

ツェンディーン・ダムディンスレン生誕110周年記念国際学会議

International Scientific Conference Dedicated to the 110th Birth Anniversary of Tsendiin Damdinsuren

岡田 和行 (東京外国語大学)

OKADA Kazuyuki (Tokyo University of Foreign Studies)

2018年9月7日(金)、「ツェンディーン・ダムディンスレン生誕110周年記念国際学会議」(モンゴル語ではЦэндийн Дамдинсүрэнгийн мэндэлсний 110 жилийн ойд зориулсан олон улсын эрдэм шинжилгээний хурал)がウランバートルで開催された。ツェンディーン・ダムディンスレン(以下Ts.ダムディンスレンと略記)は、1908年9月14日にセツェンハン部ウイゼン貝子旗(現在のドルノド県マタド郡)に生まれ、1986年5月27日にウランバートルで亡くなった、モンゴル国を代表する著名な文献学者であり作家である。

故郷のドルノド県の県都チョイバルサンでは、すでに2018年4月26日(木)にドルノド大学東部地域モンゴル研究センター、教育文化科学スポーツ省、ドルノド県知事公室、マタド郡長公室、ドルノド県中央図書館の5機関が共催した「アカデミー会員Ts.ダムディンスレンとモンゴル秘史研究(Академич Ц.Дамдинсүрэн ба Монголын нууц товчоо судлал)」という生誕110周年記念国際学会が挙行されている。今回のウランバートルの生誕110周年記念国際学会は、教育文化科学スポーツ省、モンゴル科学アカデミー、同アカデミー言語文学研究所、科学技術基金の4機関が共催し、モンゴル国立大学モンゴル研究所、モンゴル国立図書館の2機関が後援したものである。7月初旬に言語文学研究所から送付されてきた学会案内では、開催期日はTs.ダムディンスレンの誕生日を挟んだ9月13～15日となっていたが、8月初旬の開催1カ月前になって突然、1週間前倒しの9月7～8日に開催期日を変更するとの通知が届いた。何とか都合をつけて参加すると、結局9月7日の1日だけの開催となっていたが、この期日変更の理由は最後まで明らかにされなかった。また英文発表要旨と完成原稿の提出も事前に求められていたが、配布されたのは招待状付のプログラムだけだった。論文集は無理としても、発表要旨を収録した冊子もなかったのは残念である。モンゴル側のこのような対応には慣れているとはいえ、やはり脱力感を禁じえなかった。

さて、会議は午前9時45分、ウランバートルホテル4階会議場の「フフ・アサル」で80名ほどの参加者をもって挙行された。レグデル(D.Regdel)科学アカデミー総裁の開会の辞に始まり、その後、バトトルガ(Kh.Battulga)モンゴル国大統領(ホラン[Ts.Khulan]文化宗教政策担当顧問代読)、ツォグゾルマー(Ts.Tsogzolmaa)教育文化科学スポーツ省大臣(セルゲレン[B.Sergelen]文化芸術局長代読)、リグゼン(Rygzyn R.Rakshaev)駐モンゴル・ロシア連邦大使館参事官、ウヌルバヤン(Ts.Unurbayan)モンゴル国立教育大学教授、ツェンドジャブ(D.Tsendjav)モンゴル作家同盟議長、マンダフバヤル(Kh.Mandakhbayar)モンゴルジャーナリスト連盟議長(ツェンドドー[B.Tsenddoo]「ウドゥリーン・ソニン」紙副編集長代読)、アムガランバートル(Kh.Amgalanbaatar)モンゴル労働組合連合議長(代読)、バダムスレン(M.Badamsuren)ドルノド県知事(代読)、ツェンディーナ(Anna Damdinovna Tsendina)モスクワ人文大学教授(Ts.ダムディンスレンの遺子)、ガルサン(T.Galsan)国民栄誉作家などの来賓の祝辞や挨拶が続いた。引き続き、ビルグーデイ(G.Bilguudei)言語文学研

究所長の「20世紀モンゴルに運命的に生まれた啓蒙家、学術研究者、国民榮譽作家」という題目の、Ts.ダムディンスレンの社会政治活動、学術研究活動、創作活動を詳述した基調講演を聞いた後、休憩に入った。

その後、午前と午後の二部に分けてセッションが行われたが、紙幅の関係で、発表者（敬称略）と題目のみを以下に記すこととした。

午前のセッションではビルグーデイが司会をつとめ、言語文学研究所上席研究員・国家賞受賞者・功労学術研究者・アカデミー会員のツェレンソドノム (D.Tserensodnom) の「アカデミー会員 Ts.ダムディンスレンの現代モンゴル語訳『モンゴル秘史』の特徴について」、言語文学研究所上席研究員・功労学術研究者・アカデミー会員のトモルトゴ (D.Tumurtogoo) の「アカデミー会員 Ts.ダムディンスレンの言語学関係の著作について」、モスクワ人文大学のツェンディーナの「Ts.ダムディンスレンの日記から」、言語文学研究所上席研究員・功労学術研究者・アカデミー会員のボルド (L.Bold) の「新文字採用の理由について」の4本の発表があった。

ウランバートルホテルのレストランで昼食後、午後の前半のセッションでは、引き続きビルグーデイが司会をつとめ、東京外国語大学の岡田和行 (K.Okada) の「学術作家 Ts.ダムディンスレンが1957年に東京で出会ったある日本人学生」、モンゴル国文化功労者のツェデブ (D.Tsedev) の「Ts.ダムディンスレンが韻文翻訳において基づいていた原則—A.S.プーシキンの『漁師と魚の物語』の翻訳を例にして—」、北京大学外国語学院の王浩 (Wang Hao) の「Ts.ダムディンスレン研究をめぐるいくつかの想念」、ロシア科学アカデミー東洋学研究所のヤホントワ (N.S.Yakhontova) の「1933～1938年のレニングラードにおける Ts.ダムディンスレン」(ツェンディーナ代読)の4本の発表があった。

午後の中盤のセッションではツェンディーナが司会をつとめ、言語文学研究所文学研究部門長のバイガルサイハン (S.Baigalsaikhan) の「Ts.ダムディンスレンの散文作品の伝統」、言語文学研究所のナラントヤ (R.Narantuya) の「国民榮譽作家・アカデミー会員 Ts.ダムディンスレンの思想と心情」、モンゴル国立大学のノロブスレン (L.Norovsuren) の「アカデミー会員 Ts.ダムディンスレンのジャーナリスト活動とその遺産」の3本の発表があった。

午後の後半のセッションではツェデブが司会をつとめ、昭和女子大学のフフバートル (Borjigin Huhbator) の「現代モンゴル語の体系に Ts.ダムディンスレンが果たした寄与：社会言語学の観点から」、言語文学研究所言語学研究部門長のプレブジャブ (E.Purevjav) の「モンゴル語正書法研究にアカデミー会員 Ts.ダムディンスレンが果たした寄与」、モンゴル国立教育大学のエンヘー (B.Enkhee) の「国家賞三回受賞者・国民榮譽作家・アカデミー会員 Ts.ダムディンスレンの文学作品を普通教育学校で教育してきた伝統」、言語文学研究所チベット研究部門のオトゴンバートル (R.Otgonbaatar) の「恩師の書きたいいくつかの詩作品について」の4本の発表があった。

なおプログラムに記載されていた、カルムイク国立大学のツェデノワ (S.N.Tsedenova) の「Ts.ダムディンスレンの芸術社会評論」、中央民族大学の王満特嘎 (Wang Manduy-a) の「Ts.ダムディンスレンとその文学の教義」、モンゴル国文化功労者ロチン (S.Lochin) の「Ts.ダムディンスレンを非難していた数多くの非難の一つについて」の3本の発表は、発表者欠席のため行われなかった。

すべての研究発表が終了した後、プログラム上では総括討論の時間が30分ほど設けられていた

が、時間の関係で行われず、数名の長老の参加者の講評や回想を聞いた後、ビルゲーダイ言語文学研究所長の閉会の辞をもって会議は終了した。

会議終了後、場所を市内の“NOVOTEL”というホテルの16階宴会場に移して懇親会が催され、夜10時すぎに散会した。

国際会議「トド文字370周年記念会議」
International Conference “Clear Script – 370”

荒井 幸 康 (亜細亜大学)
ARAI Yukiyasu (Asia University)

2018年9月14日、ホブド国立大学にて、カルムイク国立大学と学術NGOトド・ノミン・ゲレルとの共催で国際会議「トド文字370周年記念会議」が開催された。本会議では24の発表と討議がなされ、翌15日には、オイラート系支族のザハチン人たちが住むマンハン・ソムを訪ね、その周辺の洞窟や岩に刻まれた絵を見学した。

発表は、ホブド国立大学のB.バトムフ氏の「トド文字の記念碑的作品とその文化的貢献」に始まり、モンゴル国立教育大学のNa.スフバートル氏の「ガワン・シャラブの《四オイラート史》のオリジナルとコピーの版木」といった新たに見つかったトド文字資料の紹介や、カルムイク国立大学のE.ハブノヴァ氏の「カルムイク英雄叙事詩《ジャンガル》を保持し、伝播することに対するトド文字の貢献」、ホブド国立大学のウヌルフデルゲル氏の「トド文字で継承されたある教訓話の特徴」など旧来の資料を比較分析したものなどが発表され、10年前に行われた360周年の国際会議以降の進歩が目に見える形のものとなった。

個人的には、モンゴル国立公文書館に残る1920年代、革命前後にトド文字で記された各地から中央におくられてきた手紙に関して発表したモンゴル国立教育大学のTs.ガントルガ氏の「モンゴル国立中央公文書館蔵のトド文字資料」が興味深かった。

また、トド文字写本に使われたロシア製の紙の透かしから作成年代の判定がさらに細かくできそうだというマサリク大学のセルバ・オンドレイ (Srba Ondrej) 氏による発表「ロシア手工業製紙の透かしに基づくモンゴル写本制作時期判定法」は、その手法があまり知られていなかったため、多くの人の関心を集めていた。

会議の最後に、トド文字資料研究の現状を憂い、カルムイク国立大学とモンゴルの各大学間での次世代研究者育成の協力体制を整えていくこと、これからも10年刻みで会議を行っていくことが確認され、閉幕した。

2日目のエクスカージョンで訪れたマンハン・ソムは、社会主義時代に宗教弾圧などを逃れ、トド文字の創製者ザヤ・パンディタ関係の資料など、多くのトド文字資料が残された場所として知られている。今も寺院に残るザヤ・パンディタゆかりの品々を見学した。

2018年、トド文字を記念する会議はここで紹介するホブドでの会議の他、すでに北京、ウランバートルで開かれ、11月29日よりエリスタでも開催される。

370という数字は若干中途半端な感じがするが、トド文字を記念する会議は、1958年、フィラデルフィアで行われた310周年を記念する会議が初めてである。20世紀のトド文字研究を振り返ったモンゴル国立大学のデルゲルジャルガルの「トド文字：歴史、使用、現代」という発表でも述べられているが、東西冷戦の中でアメリカに移住した人々が行った会議は極めて政治的な意味合いをもち、1968年にウランバートルとエリスタで行ったのは、それを十分意識したものであったことが知

られている。

その会議から半世紀が経ち、東西冷戦が終わり、両陣営にいた研究者たちが、お互いの知識を持ち寄って会議を行うことが出来た。20世紀は西モンゴル、カルムイク、新疆のいずれのトド文字使用地域においても、使われなくなっていった時代であったが、トド文字資料の研究の進歩を確認し、新たな協力体制を築こうとしていることには大きな意味があると思われる。

国際シンポジウム「キャフタの歴史と遺産、未来
——ロシア・日本・中国・モンゴルのダイナミズムの視点から」

The International Symposium “History, Heritages and the Future of Kyakhta:
From the Dynamism of Russia, Japan, China and Mongolia”

ボルジギン・フスレ (昭和女子大学)

Husel Borjigin (Showa Women's University)

2018年は「ロシアにおける日本年」、「日本におけるロシア年」であり、また「シベリア出兵」百周年でもあった。この記念すべき年を迎えるにあたって、同年9月14日、昭和女子大学国際文化研究所とブリヤート共和国キャフタ郷土博物館が共催、昭和女子大学、モンゴル科学アカデミー国際研究所、公益財団法人三菱財団の後援で、国際シンポジウム「キャフタの歴史と遺産、未来——ロシア・日本・中国・モンゴルのダイナミズムの視点から」がキャフタで開催された。

本シンポジウムは、ロシアやモンゴル、中国、台湾、日本の諸文書館に所蔵されているキャフタ文書を基礎に、学界の最新の研究成果を踏まえて、19世紀後半から20世紀初期にかけての、極東地域の勢力の均衡を生んだロシア・中国・日本の相互作用のコンテキストのなかで、キャフタの歴史のできごとをあらたに考察することを目的とした。シンポジウムの質を高めるために、実行委員会は、招待研究者と応募者計28名の内、16本の報告を選んだ。

9月14日午前中の開会式では、キャフタ郷土博物館館長A.V.アリヤジャポフ (A.V.Aryazhapov) の開会の辞にはじまり、ブリヤート共和国文化大臣S.B.ダガエヴァ (S. B. Dagayeva) の挨拶 (ブリヤート共和国文化省事務及び法務委員会委員長B.D. ツィビコヴァ [B. D. Tsybikovna] 代読)、ブリヤート共和国国会議員V.Zh. ツェレムピロフ (V.Zh. Tsyrempilov)、ブリヤート市市長E.V.ステパノフ (E.V. Stepanov)、東京外国語大学名誉教授・日本モンゴル学会会長二木博史、ロシア科学アカデミー会員、シベリア支局ブリヤート局長B.V.バザロフ (B.V. Bazarov、代読) などの祝辞がつづいた。

ブリヤート共和国キャフタ郷土博物館副館長L.B. ツィデノヴァ (L.B. Tsydenova) の報告“Кяхта, как форпост России торгового сотрудничества со странами Восточной Азии в музейных предметах (博物館収蔵品に見る、ロシアの対東アジア諸国交易の前進基地としてのキャフタ)”は、プーラ条約 (1727年) とキャフタ条約 (1728年) の調印によって、キャフタは貿易地としてだけでなく、シベリア領域をはるかに超えた文化的・精神的中心地の一つとしても世界的に知られたと述べ、キャフタ郷土博物館のコレクションの歴史には、キャフタ商人とほかの国や地域との広範な経済、文化関係が反映されていると力説した。

A.V.アリヤジャポフとL.B. ツィデノヴァの共同報告“A.M. Лушников и его потомки: эскиз генеалогического древа (A.M. ルシニコフとその子孫——家系図のスケッチ)”は、キャフタの商人ギルドの創立者、教育者、慈善家A.M. ルシニコフとその子孫の活動をふりかえり、同地域におけるルシニコフの貢献と影響を検討し、評価した。

日本モンゴル学会会長、東京外国語大学名誉教授二木博史の報告“On maps of Kyakhta and adjoining territories drawn by the Japanese Army”は、シベリア出兵に伴い、関東軍の関係者が1918年

に東シベリアでおこなった土地測量事業を綿密に考察し、日本側はマイマイチェン(買売城)を含む、東シベリア関係の地図を作製する際、没収したロシア側の地図をも参考にすると指摘した。

早稲田大学教育・総合科学学術院教授柳澤明の報告「1792(乾隆57)年の『キャフタ市約』と領事裁判権」は、領事裁判権は決して19世紀に欧米諸国によって突然押し付けられたものではなく、それに連なる思想がすでに清朝の政治文化の中に内在していたことをより明確な形で示し得たと指摘したうえで、南京条約・虎門寨追加条約の50年も前に、清朝がロシアに対して、後の領事裁判権につながる扱いを明示的に認めたこと、それはロシア側の強硬な要求に屈したわけではなく、むしろ一方的な譲歩の形で行われたことを明らかにした。

ブリヤート国立大学准教授O.N.ポリャンスカヤ(O.N.Polyanskaya)の報告“Кяхта (Троицкосавск) 1830 г. в истории монголоведения (モンゴル学の歴史における1830年のキャフタ[トロイツコサフスク])”は、N.Y.イアキンフ(ピチュリン)やO.M.コワレフスキー、A.V.ポポフ、V.P.ワシリエフ、P.L.シリニングらロシアの知識人の1830年のキャフタでの活動を考察し、かれらはモンゴル研究にかぎらず、オリエンタリズムの構築に大きく貢献したと高く評価した。

ブリヤート国立大学宗教学・神学学科准教授G.S.ミティボヴァ(G.S.Mityrova)の報告“Культурный ландшафт Внутренней Азии по описанию Дамба Даржаа Заяева в XVIII в. (18世紀のダムバ・ダルジャー・ザヤエフの記録にみる内陸アジアの文化的景観)”は、ブリヤートの初代バンディダ・ハムボ・ラマのダムバ・ダルジャー・ザヤエフのチベット旅行記をてがかりに、18世紀清朝領内のチベット、モンゴル地域の社会的・文化的空間の再構築をこころみた。

早稲田大学教育・総合科学学術院教授石濱裕美子の報告「ロシア・モンゴル・チベットの仏教徒を結びつけるデブン大僧院ゴマン学堂」は、19世紀末から20世紀初頭にかけて、モンゴルに滞在していたダライラマ13世がチベットや青海で学位をとった僧侶を僧院長にすえ新しい僧院を作ろうとしたことは、ダライラマ3世や5世がおこなったモンゴル布教の再開であり、ブリヤート人たちが五台山やペテルスブルグに建立したチベット僧院も、中央チベットで学んだ留学生が、学んだ内容を地方に扶植するという伝統的なシステムの再開と位置づけている。

モンゴル科学アカデミー教授O.バトサイハン(O.Batsaikhan)の報告“Монголын тусгаар тогтнол ба Хятад, Орос, Монгол гурван улсын 1915 оны Хиагтын гэрээ (モンゴルの独立と、中国、ロシア、モンゴルによる1915年のキャフタ協定)”は、「キャフタ協定」を国際法的見地からとりあげてみると、その歴史的評価に新鮮なアプローチをしよういくつかのアイデアが提示されるとし、20世紀初期の国際的な舞台上で適用されていた国際法的基準が三国協議の過程で基本的に遵守されたと見なす根拠があるという考えをのべた。

モンゴル国立大学終身教授J.オランゴア(J.Urangua)の報告“Хиагтын сайдын газрын үйл ажиллагаа / 1911-1921 он (キャフタ大臣の活動——1911～21年)”は、ボグド・ハーン政権樹立後、同政権のキャフタ駐在長官がおこなった活動などを中心に考察し、外モンゴルの独立の維持におけるキャフタの役割を検討したものであり、たいへん興味深い内容であった。

私の報告「19世紀末から20世紀初期までのキャフタと日本」は、明治時代における日本人のキャフタ調査、キャフタ会談における日本の対応、シベリア出兵とキャフタについて考察した上で、ロシア革命とシベリア出兵の直接的な結果の一つが、中国軍の外モンゴル進駐および外モンゴルの自

治の喪失といえるが、ロシア革命の成功は、外モンゴルの独立の要因になったと指摘した。

ピョートル大帝ロシア科学アカデミー人類学・民族学博物館(クンストカメラ)極東部上級研究員D.V.イワノフ(D.V.Ivanov)の報告“Монголия и Забайкалье в работах Кяхтинских фотографов /По Материалам МАЭ РАН/ (ロシア科学アカデミー人類学・民族学博物館所蔵のキャフタの撮影家が撮影したモンゴルとザバイカルの写真について)”は、タイトル通り、ロシア科学アカデミー人類学・民族学博物館の所蔵するキャフタの撮影家が撮影したモンゴルとザバイカルの写真を紹介し、その歴史的、民俗的価値は非常に大きいと強調した。

トムスク地域伝承博物館研究員A.L.コテンコ(A.L.Kotenko)の報告“Рынок предметов буддийского искусства в Северном Китае и Монголии в 1904-1915 гг.: на материалах рукописей военного востоковеда Полумордвинова М.А. в ТОКМ (1904～15年の北中国とモンゴルにおける仏教芸術市場——トムスク地域伝承博物館所蔵の東洋軍事学者M.A.ポルモルドヴィノフの資料)”は、ハルビンのロシア東洋学研究者協会のメンバーM.A.ポルモルドヴィノフののこした資料を中心に、20世紀初期の北中国とモンゴルにおける仏教芸術市場について考察し、示唆がおおかった。

ロシア科学アカデミーシベリア支局バイカル湖自然管理研究所研究員E.A.バトツェレノフ(E.A. Batotsyrenov)の報告“Иннокентий Серышев – исследователь системы народного образования в Японии в 1920 гг. (インノケンティー・セリシェフ——1920年代における日本の教育制度の研究者)”は、キャフタ出身の日本の教育制度を研究した学者インノケンティー・セリシェフの生涯をさぐり、ロシア人における日本認識において、かれが果たした役割を再評価した。

シンポジウムの二日目はキャフタから約60キロ離れたところにあるブリヤート人の最初のチベット仏教の寺院ツォンゴリスキー・ダツァンを見学した。帰り道にはコサックの歓迎儀式がおこなわれた。

同シンポジウムの内容は、『マロヂェン・ブリヤート』(ロシアの新聞)などにより報道された。また、本事業の成果をまとめた論文集が2019年3月に刊行される予定である。

国際学術会議「世界遺産「大ブルカン・カルドゥン山及び周辺の祭祀景観」
——研究・保存・保護——」

International Conference on World Heritage – Great Burkhan Khaldun Mountain
and its Surrounding Sacred Landscape: Research, Preservation and Protection

松 川 節 (大谷大学)

MATSUKAWA Takashi (Otani University)

2018年9月21日～22日、モンゴル国ウランバートル市の国立図書館大統領記念講堂において、国際学術会議「世界遺産「大ブルカン・カルドゥン山及び周辺の祭祀景観」——研究・保存・保護——」が、国際交流基金知的交流会議助成と日本学術振興会科学研究費補助金を得て開催された。モンゴル科学アカデミー歴史考古研究所が主催、大谷大学が共催し、在モンゴル・日本国大使館、モンゴル国環境観光省ハンヘンティ特別保護地区保護行政局、モンゴル国立図書館、ヘンティ県人会の後援を受けた。

国際学術会議の報告者の中核をなすのは、日本・モンゴル共同「ハンヘンティ・プロジェクト」(日本学術振興会科学研究費助成事業・基盤研究B:「モンゴルの世界遺産「大ブルカン・カルドゥン山」に関する学融合的研究」代表:松川節、2016～2018年度)参加者である。

9月21日09:30よりS. Chuluun チョローン(モンゴル科学アカデミー歴史考古研究所長)の司会で開会式が開催され、G. Ganbayar ガンバイヤル(モンゴル国教育文化科学スポーツ副大臣)、高岡正人(在モンゴル・日本国大使)がそれぞれ登壇して祝辞を述べた。

21日午前のセッションは、B. Tsogtbaatar ツォクトバートル(モンゴル科学アカデミー歴史考古研究所モンゴルセンター)の司会で6本の報告がなされた:

- ◆S. Chuluun “Mongolian Study Background of Burkhan Khaldun Mountain.” (モンゴルにおけるブルカン・カルドゥン山研究概要)
- ◆N. Urtnasan オルトナサン(モンゴル自然文化保護基金(NGO)) “Key issues of the protection of Outstanding Universal Values of World Heritage Property: “Great Burkhan Khaldun and its surrounding sacred sites landscape” .” (世界遺産「大ブルカン・カルドゥン山及び周辺の祭祀景観」の卓越した普遍的価値の保護における主要な課題)
- ◆A. Ochir オチル(国際遊牧文明研究所) “Rite of Burkhan Khaldun Mountain and Future Study Questions.” (ブルカン・カルドゥン山祭祀と今後の課題)
- ◆松川節(大谷大学) “Performance of Mongolian Japanese joint Khan-Khentii project and its Perspectives.” (モンゴル日本共同ハンヘンティ・プロジェクトの成果と展望)
- ◆B. Khashmargad ハシマルガド(モンゴル国環境観光省ハンヘンティ特別保護地区保護行政局) “Protection of World Heritage-Burkhan Khaldun Mountain.” (世界文化遺産ブルカン・カルドゥン山保護の現状)
- ◆本中眞(前内閣官房内閣参事官) “Fujisan – Sacred Place and Source of Artistic Inspiration.” (富士山: 信仰の対象と芸術の源泉)

21日午後のセッションは、松川の司会で8本の報告がなされた:

- ◆D. Tseveendorj ツェヴェーンドルジ (モンゴル科学アカデミー歴史考古研究所) “Burkhan Khaldun Mountain and the Mongolian-Japanese joint “Gurvan Gol” project.” (ブルカン・カルドゥン山とモンゴル日本共同「ゴルバンゴル」プロジェクト)
 - ◆B. Badma-Oyu バドマ=オヨー (モンゴル科学アカデミー歴史考古研究所) “Comprehensive Study Inheritance around Burkhan Khaldun Mountain.” (ブルカン・カルドゥン山周辺地域の学術研究の対象となる集合遺産)
 - ◆井上治 (島根県立大学) “Sacred Mountains Sutras from Mongolia.” (モンゴル出土山岳焚香祭祀文“サン”について)
 - ◆N. Amgalan アムガラン (ガンダン寺学術文化研究所) “Newly found Sutras about Chinggis Khaan’s and Mountains’ Rite in Khentii Province.” (ヘンティ県新発現チンギス・ハーン献祭文献と山岳献祭文献)
 - ◆J. Saruulbuyan サロールボヤン (元モンゴル国立博物館館長) “Secrecy Circumstances of the Mongols to Burkhan Khaldun Mountain’s Name.” (モンゴル人がブルカン・カルドゥン山の名を秘匿した隠された事由)
 - ◆B. Tsogtbaatar “Archaeological Studies around Great Burkhan Khaldun Mountain and Future Perspectives.” (大ブルカン・カルドゥン山周辺における考古学調査と展望)
 - ◆S.-Kh. Syrtypova スレンハンダ (ロシア科学アカデミー東洋学研究所 [モスクワ]) “Rite Customs for Ikh Khorig the Sacred Place nearly Baikal Lake.” (バイカル湖周辺のイフ・ホリグという名の聖地の献祭について)
 - ◆A. Punsag, L. Ganbat ポンサグ, ガンバト (モンゴル科学アカデミー歴史考古研究所) “Some Customs and the Worshipping of Uriankhad tribe of Burkhan Khaldun Mountain.” (ブルカン・カルドゥンのオリヤンハドたちの信仰と慣習について)
- 22日の午前のセッションは、N. オルトナサンの司会で7本の報告がなされた:
- ◆Ch. Tsetsegbaatar ツェツェグバートル (ユネスコ・モンゴル国内委員会) “Implementation of World Heritage Convention and the Burkhan Khaldun Mountain.” (世界遺産条約の推進とブルカン・カルドゥン山)
 - ◆G. Enkhbat, G. burentugs エンフバト, プレントゥグス (モンゴル国立文化遺産センター) “Role and Contribution of Center for Cultural Heritage Mongolia on the Heritage-Burkhan Khaldun Mountain Protection.” (ブルカン・カルドゥン山遺産に対するモンゴル国立文化遺産センターの役割と貢献)
 - ◆二神葉子 (東京文化財研究所) “Japan’s Sacred World Heritage Sites- Their OUV and Issues of Their Protection and Management.” (聖なる場所に関連する日本の世界遺産 - 顕著な普遍的価値とその保全管理の課題 -)
 - ◆包慕萍 (東京大学生産技術研究所) “A Study from a Perspective of Architectural History on the No.1 Building Excavation Plan at Avarga, Mongolia.” (アウラガ遺跡の「第1号建物」の発掘平面に関する建築史的考察)
 - ◆O. Battuya バトトヤー “Acclimatization of Khamnigans in Setsen Khan Province.” (セツェン・ハン・

アイマダのハムニガンの適応の問題について)

- ◆ S. Demberel デムベレル (モンゴル国立大学総合科学部) “Newly found Buddhist Sutras and Manuscripts by the Khan Khentii Project.” (ハンヘンティ・プロジェクトによって新たに発見された仏典と写本)
 - ◆ E. Ravdan, P. Enkhjargal and Ts. Oyunsuren ラブダン, エンフジャルガル, オユーンズレン (モンゴル国立大学総合科学部) “Toponymy of Burkhan Khaldun Mountain.” (ブルカン・カルドゥンの名称について)
- 22日の午後のセッションは、藤井麻湖 (愛知淑徳大学) の司会で5本の報告がなされた:
- ◆ 藤井麻湖 “Burkhan Khaldun Mountain in Modern Peoples’ View.” (現代におけるブルカン・カルドゥン山観)
 - ◆ 山口欧志 (奈良文化財研究所) “Digital Record of Cultural Heritage relating to Great Burkhan Khaldun Mountain.” (大ブルカン・カルドゥン山関連文化遺産の記録と活用)
 - ◆ B. Davaatseren ダワーツェレン (モンゴル国教育文化科学スポーツ省), G. Ankhsanaa アンフサナー (モンゴル国立文化遺産センター) “Archaeological Monuments around Sacred Binder Mountain.” (ビンデル聖山周辺の考古遺物)
 - ◆ Z. Oyumbileg オユーンビレグ (モンゴル科学技術大学) “Architectural Characteristics of Bereeven Monastery.” (ベレーヴェン寺院の建築学的特徴)
 - ◆ 三宅伸一郎 (大谷大学) “A Brief Introduction to the Short Text on Smoke Purifying Ritual (bsang) to Deities in Khan Khentii by rTsa ba rta mgrin (1867-1937).” (ツァワ・タムディン (1867-1937) によるハン・ヘンティの神がみに対するサン (bsang) 供養の儀式に関する一小品について)

以上、26本の報告がなされ、B. ツォクトバータルの司会で総合討論が行われた。討論の過程で、世界遺産「大ブルカン・カルドゥン山及び周辺の祭祀景観」の研究・保存・保護に関する諸論点が整理され、5項目から成る「提言書」が満場一致で採択され、閉幕となった。提言書は後日、モンゴル国政府に提出された。

なお、会議の予稿集が国際会議日程に合わせて刊行されており、さらに会議の報告論文集が2019年3月に刊行予定であることを付言したい。

国際モンゴル学会第2回アジア大会

Asian Seminar II of the International Association for Mongol Studies in 2018

1. 全体会議および第2部会 (言語文学)

フフバートル (昭和女子大学)

Borjigin HUIBATOR (Showa Women's University)

2018年11月3日(土)と4日(日)に国際モンゴル学会、日本モンゴル学会、昭和女子大学共催「国際モンゴル学会第2回アジア大会 “XX ЗУУНЫ МОНГОЛЫН ЕРТӨНЦ: ЭРГЭН ХАРАХ НЬ” (20世紀のモンゴル世界——回顧)」が昭和女子大学で開催された。国際モンゴル学会は事務局がモンゴル国にあるため、1959年の第1回大会から2016年の第11回大会まで1960-70年代の一時期を除き、5年に一度、国際大会をウランバートルで開催してきた。しかし、現在は36ヶ国から約400名の会員をかかえ、会員や研究者間の学術交流が進んでいるため、第11回大会以来、地域間の研究成果の情報交換を進めることを目的に、ヨーロッパ大会とアジア大会を毎年行うようにしている。第1回ヨーロッパ大会は2017年4月にサンクトペテルブルグにあるロシア科学アカデミー東洋学研究所で、第2回大会は2018年5月にポーランドのワルシャワ大学で行われ、第3回は2019年4月にハンガリーのエトヴェシュ・ロラード大学で行われる。アジア大会は、2017年11月に「第2回モンゴル文文献研究国際シンポジウム」という名称で北京の中央民族大学で行われた。そのため、アジアでは第2回から正式な名称が使われ、第3回は2019年11月に韓国のソウルにある民族博物館で行われる予定である。東京で行われた第2回大会には国際モンゴル学会会長BIRTALAN Ágnesエトヴェシュ・ロラード大学教授がブダペストから参加したほか、4名の副会長と事務局長がそれぞれ、ロシア科学アカデミー、ケンブリッジ大学、中国人民大学、日本の国立民族学博物館、モンゴル科学アカデミーから来たことを含め、日本、モンゴル、中国、台湾、ロシア連邦、ハンガリー、イギリス、ドイツなど8ヶ国から約50名の研究者が基調講演と研究発表などを行った。

本報告は全体会議と第2部会「言語文学」についてであり、第1部会「歴史」については二木博史(東京外国語大学)、第3部会「宗教、文化、現代社会」については上村明(東京外国語大学)が報告する。

全体会議では、3日の開会式と基調講演はフフバートル(昭和女子大学)が総司会を務め、まず、モンゴル国大統領ハルトマーギーン・バートルガの祝辞が駐日モンゴル国特命全権大使D.バッチャルガル(D.Batjargal)によって読みあげられ、金子朝子昭和女子大学学長に手渡された。次いで、金子朝子学長が歓迎の辞を述べ、国際モンゴル学会事務局長S.チョローンが大会の趣旨を説明した。その後、記念写真を撮り、休憩を挟んで基調講演に入った。基調講演者は4名で、まず、二木博史(東京外国語大学、日本モンゴル学会会長)「20世紀における日本のモンゴル研究の概要」は、日本のモンゴル研究の始まりとしての戦前の研究の特徴及び世界的な日本人学者たちの研究、特に、鈴江萬太郎と下永憲次による陸軍省編纂『蒙古語大辞典』、鈴江萬太郎による北京版モンゴル語木版資料のコレクションが東洋文庫のモンゴル語資料のベースになったことなどについて述べ、内陸アジア研究が中国研究で始まった日本において「東アジア」を見る視点と日本人の中国中心の思考を変える

のに貢献したことを強調した。BIRTALAN Ágnes (ハンガリーのエトヴェシュ・ロラード大学、国際モンゴル学会会長)「20世紀におけるモンゴルのシャマンの迫害についての語り」は、モンゴルの社会主義時代にシャマンが受けた迫害の語りについて、自らのフィールド調査による貴重な資料に基づき、社会主義時代におけるシャマンの活動範囲、迫害についての個人の回顧、迫害を耐えぬく戦略、社会主義時代におけるシャマンの活動の精神の面からその疑問点について述べた。Bazarov Boris (ロシア科学アカデミー会員、ロシア科学アカデミー・シベリア支部)「内戦時代のブリヤート民族運動——地政学的側面」は、帝政ロシア領で内戦が展開され、帝政崩壊の当時、ブリヤートは解放された状態になり、次第に異なる傾向を示す多くの政治勢力が生まれたため、ブリヤートの知識人たちは民族の統合をめざして政治的自治や半独立を宣言したが、パン・モンゴル運動は統一性がなく、1921年のモンゴル革命により、それまでの知識人たちによる政治勢力は思想的基盤を失い、モンゴル系民族分布地がロシア新政権の政治イデオロギーの指導下に入ったことを述べた。田中克彦(一橋大学)「東京で開催されるモンゴル研究国際大会へのメッセージ」は、モンゴル民族にとって20世紀は分断の世紀であり、分断されても別々の統一国家内で自治をすることは可能であっただろうが、書きことばの統一が必要であったことを強調し、それを実現させようとしたブリヤート・モンゴル人Bazar Baradin (1878-1938)の大英図書館における「ロシア革命100周年展示」に出されたラテン文字によるポスターについて述べた。

4日午後の全体会議の総括では、ボルジギン・ブレンサイン(滋賀県立大学)、D.ザヤーバートル(モンゴル国立大学)、上村明(東京外国語大学)がそれぞれ第1部会、第2部会、第3部会の研究発表内容をまとめ、閉会式では、BIRTALAN Ágnes(国際モンゴル学会会長)、小長谷有紀(国際モンゴル学会副会長)、二木博史(日本モンゴル学会会長)が大会の進行状況と成果、意義などについてまとめのあいさつを述べ、フフバートル(昭和女子大学教授)が主催側の代表者として謝意を述べた。

3日午後、ケレードジン・D.ブルグド(中国社会科学院)「『盧龍塞略』の「譯部」に見られるモンゴル語方言の特徴」は、1610年に出された本書の「譯部」に収録された1300余の漢蒙訳モンゴル語彙について、異なる年代の漢蒙訳語彙との比較によりその方言の特徴を分析した。呉人トゥグス(東京外国語大学)「キリスト教宣教師たちが編纂したある教科書の文章表現について」は、1931年にチャハルのアドーチン旗のハダグン・ソムで出された「“Angqan surqu köbegüd-i uduridun suryaqu biçig” (初めて学ぶ子どもたちを指導する本)」について言語学の視点から分析した。T.オトゴントール(モンゴル国立大学)「モンゴルにおける満洲研究の現状と展望」は、モンゴル国における満洲研究について、モンゴル国立大学での満洲語教育、満洲語文献研究と翻訳、満洲語文法研究、満洲語、モンゴル語、朝鮮語の比較研究等を紹介した。ドラーン(北京大学)「D.ナツァグドルジの“Хэлхээгүй Сувд” (糸に通していない真珠)という中編小説について」は、D.ナツァグドルジの他の作品との比較により、本作品の特徴として『紅樓夢』や『今古奇観』などモンゴル語に翻訳された中国文学の影響が観察されたことやD.ナツァグドルジがこの作品をヨーロッパと中国文学の影響を受けたモンゴル語長編小説にする予定であったことが判明されたなど、テキスト分析の成果について述べた。Innokentii G. Aktamov(ブリヤート国立大学)「現代のモンゴルの若者たちの公共意識：基本的な価値と変化」は、現代モンゴルの青年たちの公共意識について行った研究プロジェクトの成果について

の報告で、モンゴルの若者たちがどんな希望や展望をもっているかについて、彼らがおかれている政治的、社会的、経済的環境からその傾向と変化を考察した内容であった。J. バヤンサン (モンゴル文化芸術大学)「民族的情感と比喩の意味との相互関係について」は、民族的情感が形成する必然的な諸要素とその研究に関連する学術諸分野及び民族的情感の言語表現の形式としての格言やことわざなどから当該民族の伝統文化、世界観、価値観などの特徴を観察するに至った成果について述べた。

4日午前、Petrova Maria (サンクトペテルブルグ国立大学)「G. アヨールザナの小説『神聖なハンガイの秘密』に見る20世紀初期のモンゴル」は、2010年以来多くの小説を書いたことで知られる作家G. アヨールザナ (1970年生まれ) のこの小説が魔術的リアリズムで書かれていること、清朝末期、独立当時のモンゴルの日常生活がガルシア・マルケスによるラテンアメリカの有名な小説『百年の孤独』のように空想的な世界と結びついて描写されていることを強調した。Badagarov Jargal (ハイデルベルク大学、ブリヤート国立大学)「モンゴル語最初の新聞ブリヤート・モンゴルの“Дорно зах хязгаарын аж төрөл” (東部辺境の生活、1895-97) ——言語文化、社会歴史研究の貴重な資料」は、P.A. Badmaevによりチタ市でロシア語とモンゴル語で出されていた本紙の紹介、皇室の医者、政治顧問、社会活動家、経営者であった彼がなぜこの新聞を刊行したかの理由、発表者が数年間にわたって本紙を収集した経緯と本紙の言語文化、社会歴史研究における価値などについて述べた。Ts. バトドルジ (モンゴル科学アカデミー言語文学研究所)「ハルハ方言語頭音節における口蓋、咽頭の短母音」は、モンゴル語音声学の従来の研究で考えられていた /a/, /o/, /u/ という三つの音素の口蓋化しない三つの異音 [a], [o], [u] と口蓋化する三つの異音 [æ], [œ], [y] について、実験音声学の音響法 (acoustical method) と聴覚実践法 (auditorial method) によって研究した結果について報告した。フフバートル (昭和女子大学)「ソ連の顧問G.P.Serdyuchenkoと内モンゴルの標準語——公文書館資料にみる1950年代のモンゴル人民共和国と内モンゴルの言語関係」は、1954年10月から1957年7月まで中国社会科学院と中央民族学院で言語学ソ連顧問を務めていたG.P.Serdyuchenkoの漢語「標準語」論の導入から内モンゴルのモンゴル語標準語がどうあるべきについて述べた未公開資料について分析した。D. ザヤーバートル (モンゴル国立大学)「文字問題に関するモンゴル国の政策、実用性、世論と傾向」は、キリル文字を使用しながら政府の公文書等にモンゴル文字を使用しているモンゴル国の現状と2015年に採択された「モンゴル語関連法」で「2025年から二文字併用」が定められた状況などを踏まえ、モンゴル国における文字問題に関する国家政策、モンゴル文字とキリル文字を使用している具体的な状況、それぞれの文字に対する世論などについて述べた。D. トモルトゴ (モンゴル科学アカデミー会員)「キリル文字使用の経験」は、モンゴル人が歴史的に使用してきた文字の正書法がモンゴル語の音韻体系と語構成を正確に反映していたこと、20世紀のモンゴル社会の変化に伴い、話しことばに近い学びやすい文字をつくる必要から使用されたキリル文字がモンゴル国の近代化に果たした重要な役割を評価し、モンゴル語研究が進んでいなかった当時作成されたキリル文字正書法の欠点について、キリル文字使用15年目に行われた国際学術会議で内外の多くの学者から指摘があったにもかかわらず、現在に至ってもその正書法が使用され、その議論に時間を費やしていることを批判し、より時代にあった言語研究をすべきと強調した。

4日午後、O. デムチグマー (モンゴル国立大学)「モンゴルにおけるチベット研究の概要」は、チベッ

ト文化とチベット研究のモンゴルにおける意義、20世紀前半にモンゴルでダメージを受けたチベット文化と20世紀中期から始まったモンゴルのチベット研究が20世紀末期からの民主化以来強化され、数多くの研究成果、翻訳、辞書などが出版され、モンゴル国立大学文献・アルタイ研究学部の学生、大学院生たちがそれに貢献してきたことが紹介された。荒井幸康（北海道大学スラブ研究センター）「ロシアにおけるモンゴル諸語の聖書翻訳——概要」は、カルムイクとブリヤートが帝政ロシアの一部になって以来多くのキリスト教宣教師がモンゴル系の人々をキリスト教徒にすることを試み、また、聖書のモンゴル諸語翻訳を試みたことについて、18世紀からロシア革命までの状況を紹介した。S.エンフジャルガル（モンゴル科学アカデミー言語文学研究所）「モンゴル語慣用表現における民族的感情的特徴の反映」は、モンゴル語の慣用表現としてのことわざ、格言、俚諺、*ертөнцийн гурав*（世界の三つ）などの特徴として、抽象的な現象を見えるものと見えないもので表現し、また具体化し、有生化して（命のあるものとして）表現するなど、遊牧民の空間と時間、価値観の体系が反映され、それが定住民の場合と異なることについて述べた。

2. 第1部会（歴史）

二 木 博 史（東京外国語大学）

FUTAKI Hiroshi (Tokyo University of Foreign Studies)

11月3日の午後は7名が研究発表をおこなった。

最初の橋誠（下関市立大学）「W.W.Rockhillの1913年の外モンゴル訪問—William Woodville Rockhill Papersを利用した分析」は、外交官・チベット研究者として著名なロックヒルの1913年すえの外モンゴル訪問をとりあげ、かれの日記とかれあての国防大臣ゴンボスレンの書簡をもちいて、当時のアメリカの対モンゴル政策について論じた。つぎの李保文（Li Baowen, 中国第一歴史文書館）「清朝の新政の時期にモンゴルの行政組織の改編に関して貴族・官僚が提出した上奏文とその結果」は、光緒29年（1903年）から宣統2年（1910年）までの、モンゴルに省を設置すべきという意見をのべた4度の上奏をとりあげ、それらが最終的に否定された背景についてのべた。ガンバガナ（国際教養大学）「テムチグドンロブ王に関連する映像とその価値」は、日本がわの撮影したテムチグドンロブ王の貴重な映像を紹介した。

宮脇（岡田）淳子（東洋文庫）「徳王の夢を実現させたふたりのモンゴル人—Sechin JagchidとGombojab Hangin」は、テムチグドンロブ王の側近をつとめたあとアメリカで研究生生活をおくった歴史学者セチン・ジャグチドと言語学者ゴンボジャブ・ハンギンのプロフィールとふたりに対する岡田英弘研究室でのインタビュー、かれらののこしたメモワールの概要についてのべた。S.L.クズミン（ロシア科学アカデミー東洋学研究所）「人民の選択か？ 革命の輸出か？—モンゴルと中央アジアのいくつかの国家における王制から社会主義への移行のメカニズム」は、モンゴル、チベット、ヒヴァ、ブハラにおける社会主義政権の確立のプロセスを比較し、チベットの場合は他の地域とことなり、主体となる現地の政党が不在だったことを強調した。

M.オドマンダフ (モンゴル教育大学)「モンゴルのブリヤート人の移動と定着」は、20世紀の4度のブリヤート人のロシアからモンゴルへの移動の要因をとりあげ、ロシアにおける社会・経済的な状況の悪化や戦争以外に、モンゴルの独立、さらにはモロン師の予言 (lünden) といった宗教的要素も作用したこと、ブリヤート人のためにハルハ河ブリヤート旗など6ホショーがつくられたことを説明した。N.ナラルマー (モンゴル科学アカデミー歴史学考古学研究所) は、ボグド・ハーン国、モンゴル人民共和国、モンゴル国の国章の変遷を具体的に紹介し、それがモンゴルの20世紀の歴史を反映していることを論じた。

ふつかめの11月4日の午前中は6名が報告した。B.オヨンダライ (中国内モンゴル自治区正藍旗、代読)「ドンロブ公とかれの目的」は、チャハル正藍旗の新ウールド・ソムのソム長ドンロブの活動(モンゴル軍の内モンゴル方面への軍事作戦への参加、ボグド・ハーン政府から首都フレー駐屯チャハル軍部隊の司令官に任命されトゥシェー公の称号を獲得、内モンゴルへもどったあとの学校の設立)について紹介した。広川佐保 (新潟大学)「近代内モンゴルにおける省の設置と盟旗制」は、中華民国政府による1914年の3特別行政区の設置、1928年の3省(綏遠、チャハル、熱河)の設置による内モンゴルの行政組織の変化、盟旗と県の併存、モンゴル王侯の対応について論じた。J.オランゴア (モンゴル国立大学)「日本の援助をもとめたモンゴル人—1910、20年代の文書史料はなにをかたるか?」は、モンゴル人がロシアやアメリカだけではなく、日本からも援助をもとめようとした事実をモンゴルと日本の文書館に所蔵されている資料から説明し、当時の国際関係、地政学的環境にもとづきその背景を分析した。劉迪南 (Liu Dinan, 北京大学)「現代モンゴル史についての歴史記述の諸問題—歴史書を中心に」は、1934年のアマル『モンゴル小史』、1954年の『モンゴル人民共和国史』、1960年代の3巻本の『モンゴル人民共和国史』、2003年の5巻本の『モンゴル国史』などの記述にもとづき、これらの歴史書の編纂と実際の歴史の推移の関係を論じた。A.S.ジェレズニャコフ (ロシア科学アカデミー東洋学研究所)「文明の指標という観点からみたエルデネピル師のモンゴル史」は、ガンダン寺の管長をつとめたN.エルデネベルが1930年のすえにあらわした『モンゴルにおける諸宗教の縁起』にのべられた歴史哲学が、内陸アジアに位置するモンゴルの歴史をあらたに記述するのに有効だとのべた。ボルジギン・フセル (昭和女子大学)「第二次大戦後の内モンゴルにおけるソ連の諜報活動」は、ロシア・モンゴルの文書館に所蔵される文書史料の分析にもとづき、ソ連軍の撤退後には満洲里 (Manzhouli) におかれたソ連領事館が情報収集の中心になったこと、ソ連が中国・モンゴルに対する政策のカードとして内モンゴルをつかっただこと、中国もモンゴルも内モンゴルの将来に関するソ連の立場をうけいれたことをあきらかにした。

同日の午後は6名が報告した。Maqsooda.S.Sarfi (公立小松大学)「20世紀—インドとモンゴルの関係」は、インドとモンゴルがふるい時代から宗教・文化上のつながりをもってきたことを強調したうえで、1955年の国交樹立以降の両国の関係を概観した。B.バヤルサイハン (トウワ人文・応用社会経済研究所)「トウワにおけるモンゴル研究の歴史と現在の課題」は、歴史家Yu.L.Aranchynがトウワにおけるモンゴル研究の基礎をきずいたこと、アカデミー会員K.A.Bicheldeiのイニシャチブでモンゴル研究の拠点が発立されたことなどについて紹介した。孔令偉 (Ling-Wei Kung, コロンビア大学)「ユーラシアのネットワーク—18世紀におけるトルゴート・モンゴル人、中央チベットと清朝」は、トルゴートと中央チベットの関係をしめす、新疆で発見されたチベット語の新資料に注目しつ

つ、ザヤ・パンディタの弟子アルダル・ガブジュ (Aldar bka' bcu) の活動、清とズーンガル帝国の関係などについてのべた。

ボルジギダイ・オヨーンビリグ (中国人民大学)「清朝前期・中期のチベットにおけるモンゴル語」は、過去5年間のチベットでの調査にもとづき、清朝からチベットへおくられたおおくの重要な文書がモンゴル語で作成された事実注意到を喚起し、ホシヨード・ハーン国の影響があとの時代にものこったことを強調するとともに、チベット自治区文書館に所蔵される駐蔵大臣に関わる公文書の概要をはじめて紹介した。S.チョローン (モンゴル科学アカデミー歴史学考古学研究所)「内モンゴル出身のある青年共産主義者—その運命と遺産」は1920年代到北京からモンゴルにおもむいたあと、レニングラードに留学しモンゴル人ではじめて法律の学士号を獲得したウルズイーバドラフの生涯、ロシア人の妻が保管していた貴重な写真、その他の資料について紹介した。Uradyн E. Bulag (ケンブリッジ大学)「専門家およびアマチュアによるチンギス・ハーン陵の探索—“モンゴル・元文化”にあこがれる中国のムスリム」は、チンギスがなくなったとされる六盤山 (Liupanshan) を中心とした、寧夏回族自治区のアマチュア研究者によるチンギス・ハーン陵さがしが“モンゴル・元文化”をつくりだそうとしている中国ムスリムにとっていかなる意味をもつかを考察した。

なお歴史部会への参加が予定されていた中国の内モンゴル大学のソドビリグ、ナサンバヤル、ナヒヤの3名はビザ取得がまにあわず残念ながら不参加となった。

3. 第3部会 (宗教、文化、現代社会)

上 村 明 (東京外国語大学)

KAMIMURA Akira (Tokyo University of Foreign Studies)

第3部会は、3つのパネルで構成され合計9本の発表があった。本部会は、発表の数が少なく、テーマの幅も広いので、それぞれの発表について紹介する。

宗教に関連するテーマの第1パネルの最初は、台湾の文化部に勤務し現在インディアナ大学で研究する Baatar C.H. Hai 氏による、雍和宮にあるジャンジャ・ホトクトの印のコレクションについての発表 “Talk on the Seal of Imperial tutor Chankya Hutuktu” であった。発表者は、3世ジャンジャ・ホトクトと乾隆帝の緊密な関係、国師の称号とパクパ文字の印について、清朝皇帝がホトクトに称号をどのように授けたか、また7世ジャンジャ・ホトクトの事跡など、清朝皇帝とジャンジャ・ホトクトの関係を、印から明らかにした。桜美林大学バイガル氏による発表 “Шведийн шашин дэлгэрүүлэгчийн камерт буусан монголын нийгэм” は、1913年から1939年内モンゴルで布教活動を行ったスウェーデン人医師 Joel Eriksson の撮影した写真のコレクションに関するもので、その中に、布教活動、徳王などの個人や当時のモンゴル人の生活を写した写真のほか、眼病、性病患者など、当時の社会の負の側面である病気、貧困、風紀紊乱を写した写真が多く含まれていることを指摘し、このような社会状況が布教の動機となっていたことを示唆した。長崎大学瀧澤克彦氏によるモンゴル国におけるキリスト教についての発表 “Монгол дахь Христигэл: Түүх ба одоогийн байдал” は、

統計データにより現在モンゴルで福音派が勢力を得ていることを明らかにし、その救済と信者への物質的支援について述べるとともに、信者の社会ネットワークが、グローバル化により海外にも延び、ナショナリズムと結びついてキリスト教の新しい形を作りつつあると論じた。

つぎのパネルでは、現代社会についての2本の発表と内モンゴルの歴史についての発表1本があった。最初の発表、ロシア科学アカデミー・シベリア支部のБадараев Дамдин氏による“Urbanization on the territories of the Mongolian world: state and tendencies of development”は、モンゴル国とロシア連邦ブリヤート共和国の都市化について論じ、ウランバートルのゲル街と同様にウランウデ近郊にも建築と解体が容易な1階建ての木造家屋が都市流入者によって大量に建設されていること、深刻な環境問題など、両地域および両首都の都市化の現状と直面する問題が似かよっていることが指摘された。静岡大学の楊海英氏の“Chinese Cultural Revolution and Inner Mongolia under the Socialist Policy”は、文化革命期における内モンゴルでのモンゴル人大虐殺が中国の「民族問題解決」のために行われたこと、1925年創設の内モンゴル人民革命党がコミンテルンの指導のもと中国共産党と兄弟政党であったこと、中国と日本の植民地であった内モンゴルが中国に統一されることになった経緯について語った。京都大学院生Ж.Жаргалмаа氏の発表“Их дээд сургуулийн удирдлагын систем”は、モンゴルの大学運営に関する法規の変遷を社会主義時代からたどり、1990年代からの大きな変化として1995年に運営理事会の設置が義務づけられたことを挙げる。そして、そのメンバーに関する規定が度々変わった背景には、財産権と大学の公開性という2つの原則の葛藤があることを示唆した。

第3のパネルでは、それぞれ牧畜、現代社会、民族集団についての3本の発表があった。東京外国語大学の上村明氏の発表“Review of Land Reform and Development Programs in the Pastoral Sector in Post-Socialist Mongolia”は、ポスト社会主義時代とくに2000年代以降の国際機関主導による牧畜民グループを組織する開発プロジェクトが、牧地使用における牧畜民の排他的意識を強めていることを指摘し、その指針となったE.オストロム(1990)の共有資源設計の原則そのものが誤りであることを示唆した。高知大学の湊邦生氏の発表“Looking Back on MPR: The Mongolian Attitude toward Their Country and Life under Socialism”は、現在のモンゴル人が社会主義時代のモンゴルをどう評価しているか、アンケート調査の結果をもとに政治、経済、生活、汚職の4つの指標により分析し、ほかの旧社会主義国に比べモンゴル国では、現在のモンゴル国を社会主義時代と比較して、政治と経済に関しては高く、汚職に関しては低く評価する傾向があることを指摘した。最後のドイツのモンゴル学者ホルツバートル氏の“Ордосын тайлга тахилгын Дархадын тухай”は、ダルハドのチンギス祭祀とその名の由来について論じ、ウランバートル近郊のフイス・トルゴイで発見された突厥時代の碑文やアルハンガイ県のボガトで発見された581年のソグド語碑文に登場するダルハドについての記述を紹介した。

各発表の後には質疑応答が活発に行われた。とくにモンゴル国立大学学長、教育科学大臣、国会議長を歴任したS.トゥムルオチル氏が積極的に参加したことは特筆に値する。

中国社会科学院シルクロード文化研究センター設立準備シンポジウム：

第1回シルクロード伝統文化年次国際会議

The Preparatory Symposium for the Founding of the Silk Road Cultural Research Center at CASS:

The 1st Annual International Conference on Traditional Cultures along the Silk Road

二 木 博 史 (東京外国語大学)

FUTAKI Hiroshi (Tokyo University of Foreign Studies)

2018年11月15日から17日まで、中国・北京のMerchantelホテルを会場に、中国社会科学院の“一帯一路”国際シンクタンク、アジア太平洋・グローバル戦略研究院、民族文学研究所の三機関の共催で、シルクロード文化研究、叙事詩研究の国際会議がひらかれた。

初日は「シルクロード文化の研究」(Studies on Cultures along the Silk Road)、ふつかめは「ジャンガル研究と叙事詩研究」(Studies on Jangar and Epic Studies in General)、みっかめは「B. ブリンベヒの叙事詩研究」(Studies on B. Burenbeki's Thoughts on Epic Studies) というふうにより3種類のテーマで会議がすすめられた。総括の会議では、計57名が発表したと報告されたが、わたしが確認できたのは55本の発表のみである。中国以外に、モンゴル、ロシア、フィンランド、ハンガリー、ポーランド、ドイツ、韓国、日本から研究者が参加した。

ふつかめは、新疆のホボクサイルからきたジャンガルの語り手によるパフォーマンスもあり、民族文学研究所がかなりちからをいれて組織したことがうかがわれた。66篇をおさめた『论文集』(Conference Proceedings)があらかじめ印刷され、たとえばロシアの叙事詩研究の大家С.Ю. Неклюдовの長文の論文(Калмыцкий Эпос о Джангаре)も掲載されていたが、会議への参加はなかった。ジャンガル関係の発表が25本、ゲセル研究が8本というふうにより、全体として叙事詩研究の発表がおおく、とくにロシアの研究者による研究発表の質はたかかった。

紙数の関係から、初日の研究発表については、簡単にその内容にも言及するが、ふつかめ、みっかめについては発表者とタイトルのみをしるす。

11月15日午前9時からの開会式では、民族文学研究所所長チョグジンが開会のあいさつをし、同研究所党支部書記チョク、ハンガリー科学アカデミー民族文学研究所長のBalázs Baloghらが祝辞をのべた。

午前中は5名が基調報告をおこなった。最初の沈卫荣(Shen Weirong、清华大学)「われわれはいまだにシャングリラにとらわれているのか？オリエンタリズム、内的オリエンタリズム(internal Orientalism)、オリエンタリズムの内化(internalization of Orientalism)」は20年まえに刊行されたDonald Lopez Jr., *The Prisoners of Shangri-la: Tibetan Buddhism and the West*に言及したうえで、オリエンタリズムの典型であるシャングリラ=チベットの図式が中国国内で定着し、チベットのイメージの固定化がすすんでいる現状を批判した。つぎのフィンランドのLauri Harvilahti (The Folklore Archives of the Finnish Literature Society)「シルクロード東部の叙事詩—伝統的口承韻文作品の神話的イメージの一瞥」は、Aarne-Thompson-Uther motif indexのE761に該当するモンゴル・チュルクの

叙事詩のモチーフとフィンランドのLemminkäinenを比較した。巴莫曲布嫫 (Bamo Qubumo、民族文学研究所)「方法としての“シルクロード” —ユネスコの“Roads of Dialogue” プロジェクトの実践的価値」は、ユネスコの推進する文化間の対話の一環としてシルクロード研究をとらえるとともに中国の推進する“一带一路”構想との関連についてのべた。Oyunbilig (人民大学)「清代のチベットにおけるモンゴル語の地位と役割」は、理藩院以外の清朝の役所からのチベットあての文書や駐蔵大臣とチベット僧院のあいだの文書のやりとりでモンゴル語がつかわれていた事例をとりあげ、チベットでモンゴル語が共通語として重要な役割をはたしていたことを強調した。Čoyjin (民族文学研究所)「“一带一路”構想と無形文化遺産の保護」は、中国における“一带一路”構想と伝統文化の保護の実践について概説した。

午後は12名が発表した。まずRinčindorji (民族文学研究所)「中国の各民族の英雄叙事詩の共通性」は、中国の三大叙事詩であるゲセル／ケサル、ジャンガル、マナスをとりあげた。Balázs Balogh (ハンガリー科学アカデミー民族学研究所)「東洋への焦点—ハンガリー科学アカデミー民族学研究所のアジア大陸における学術的努力」は同研究所のこれまでの研究蓄積の紹介であった。Nikolay Samoylov (サンクトペテルブルク大学)「19世紀はじめにモンゴル経由でロシアから北京をおとずれたロシア人画家たちの民族と文化」は、ロシアの外交団や探検隊に同行した画家たち、とくにAndrey Martynovの作品をとりあげ、19世紀はじめのモンゴル人の生活を記録した資料として特別な価値を有することを具体的な例によってしめした、興味ぶかい報告だった。С.Дулам (モンゴル文化芸術大学)「“ロバの耳の王様の道” という名称について」は、実際には岸壁画の解釈についての発表だった。Н.С.Яхонтова (ロシア科学アカデミー東洋写本研究所)「サンクトペテルブルクのロシア科学アカデミー東洋写本研究所所蔵のオイラト語の写本と木版本」は、同研究所に所蔵される500点以上のトド文字文献の収集の歴史、その特徴についてのべた。

コーヒーブレークのあと、まずHurcabaatur Solonggod (IMoFiF Elians e. V. Publisher、ドイツ)「シルクロードのブラーフミー文字」は、フイス・トルゴイ碑文につかわれているブラーフミー文字を“モンゴル・ブラーフミー文字”と命名してその特徴について説明した。Kemecsi Lajos Zoltán (ハンガリー科学アカデミー)「民族学博物館の中国コレクション」は、同博物館のコレクションの概要を紹介した。Katarzyna Golik (ポーランド科学アカデミー)「統一の象徴か、それとも分裂の象徴か—今日のユーロ・アジア関係におけるチングス・ハーン」は、各国におけるチングス・ハーンの評価にふれたあと、ポーランドでのTatar legacyを論じた。Ц.Багтулга (モンゴル国立大学)「ルーン文字のきざまれた楽器」は、ホブド県マンハン郡から出土した楽器にルーン文字できざまれた古代トルコ語の銘文の内容をもとに、西暦590年から670年の時期に叙事詩がかたられていたと主張した。Čenggel (中国社会科学院歴史研究所)「イル・ハン国におけるモンゴル語使用の遺産と後代への影響」は、イル・ハン国でモンゴル語がさまざまなかたちで使用された例をしめし、その影響が明代の15世紀の文書にもみられることをあきらかにした。А.Алимаа (モンゴル科学アカデミー言語文学研究所)「モンゴル叙事詩のモチーフのデータベースの構築」は、мотив (モチーフ) や сюжет (プロット) などの用語の定義を明確にしたうえで、さまざまな分野の研究者の協力によってモチーフのデータベースをつくる必要があるとうたえた。Lee Sona (ソウル大学)「越境の時代におけるモンゴル英雄叙事詩の文化的アイデンティティの研究」は、英雄叙事詩が時代ごとにその状況に対応しつつ変

化してきたことを指摘し、インターネットやデジタルの時代の英雄叙事詩のありかたを論じた。

11月16日

第2セッション「ジャンガル研究と叙事詩研究」

Kesigtoyaqu (中央民族大学)「叙事詩ジャンガルにみられる初期のモンゴルの政治体制」

Цендина А.Д. (ロシア人文大学)「アカデミー会員II. ダムディンスレンのジャンガル研究」

Бичеев Б.А. (ロシア科学アカデミー・カルムイク科学センター)「V.L. コトヴィッチ文書から発見されたジャンガルの採録に関する新資料」

Sečenmönge (西北民族大学)「国内外におけるモンゴル英雄叙事詩研究の回顧と展望」

Bu.Möngke (西北民族大学)「ジョーナの“かかれたジャンガル”と“創作されたジャンガル”の問題」

Г.Нандинбилиг (モンゴル国立大学)「叙事詩ジャンガルにおける宗教文化」

Lauri Harvilahti (The Folklore Archives of the Finnish Literature Society)「モンゴルの叙事詩における詩的修辭—Gustav John Ramstedtが1900年と1909年に採録した2種類のジャンガル」

Č.Čolmon (内モンゴル師範大学)「古代モンゴルの英雄崇拜あるいは靈魂観—叙事詩ジャンガルの文化的研究」

Селеева Ц.Б. (ロシア科学アカデミー・カルムイク科学センター)「時間の経過のなかでの叙事詩ジャンガル—テキストと詩的形式の維持と変容」

Jaγar (内モンゴル師範大学)「叙事詩ジャンガルにみられる魔法のウマ」

Ц.Жаргалсайхан (モンゴル文化遺産センター)「モンゴル叙事詩の保存」

Sarangerel (中央民族大学)「叙事詩ジャンガルにおける戦士と戦争」

Čoγtu (中央民族大学)「ホールチ・リンチンのかたった叙事詩ジャンガル」

Rabdan (新疆文学芸術団体連合会)「新疆におけるジャンガルの採録、整理、出版、翻訳」

To. Öljeyisang (内モンゴル河套学院)「叙事のロジックとジャンガルにおける民話のタイプの応用」

Erdei (ホボクサイル・モンゴル自治県)「ホボクサイル県においていかにジャンガル文化観光事業を発展させるか」

Oči (内モンゴル師範大学)「即興と暗唱—現代の語り手によるジャンガルのなかのアルタン・チェー
ジ像にみられる欠落」

Б.М.Нармаев (サンクトペテルブルク大学)「ロシアにおけるチベットの叙事詩ケサルの研究」

Б.С.Дугаров (ロシア科学アカデミー・シベリア支部)「ブリヤート・ゲセルと民族的文化的伝統」

Л.С.Дампилова, Е.В.Аюшеева (ロシア科学アカデミー・シベリア支部)「ブリヤート諸版のゲセル」

二木博史 (東京外国語大学)「諸写本の比較によるゲセル物語のナンドルモ魔王の章の再検討」

С.Д.Гымпилова, Л.Ц.Санжеева (ロシア科学アカデミー・シベリア支部)「ブリヤート・ゲセルの詩学」

Qasunγov-a (内モンゴル師範大学)「ゲセルの口承の変異—叙事詩から伝説への変容」

Sečenmönge (中国社会科学院民族文学研究所)「ゲセルとジャンガルの保存と発展」

Urγumal (民族文学研究所)「家族内のあそびをテーマにしたモンゴル叙事詩の研究」

Almas (バーリン右旗ゲセル文化研究発展センター)「バーリン・ゲセルの文化事業の回顧と展望」

11月17日

第3セッション「布林ベヒの叙事詩研究」

Manduqu (中央民族大学) 「Ba. ブリンベヒとモンゴル口承文芸研究—Ba. ブリンベヒ生誕90周年によ
せて」

満全 (Manquan, 内モンゴル師範大学) 「近代化と民族性が一体化した詩学体系—B. ブリンベヒの詩
学体系の研究」

陈岗龙 (Chen Ganglong, 北京大学) 「*Mongyol bayaturliḡ tuulis-un silüḡ jüi*の漢語訳」

Erdeniqada (内モンゴル大学) 「抒情、“第二の自然”と詩歌創作における個別化—*Uyangy-a-yin
erilčin-ü temdeglel*の詩学理論」

Urusqal (内モンゴル大学) 「Ba. ブリンベヒの詩学研究とその方法論」

Б.Мөнхбаяр (モンゴル科学アカデミー言語文学研究所) 「偉大な学者・文学者B. ブリンベヒとモンゴ
ル文学の関係」

Čoytu (中央民族大学) 「布林ベヒの *Amilal-un belgetü čečeg* における反復の美学」

Р.Бигэрмаа (モンゴル科学技術大学) 「内モンゴルの詩人B. ブリンベヒの散文詩」

Č.Čolmon (内モンゴル師範大学) 「*Uyangy-a-yin erilčin*の抒情的精神の軌跡—B. ブリンベヒの理論と
文学作品の総合的検討」

吴刚 (Wu Gang, 民族文学研究所) 「B. ブリンベヒの詩学思想の今日的意義」

冯文开 (Feng Wenkai, 内モンゴル大学) 「『モンゴル英雄叙事詩の詩学』を評する」

Orgil (中央民族大学) 「B. ブリンベヒの叙事詩理論の伝統文化的基盤」